

論文内容の要旨

報告番号		氏名	井上 和也
Feasibility and Efficacy of Definitive Radiotherapy with 66 Gy and Concurrent Carboplatin-Paclitaxel Chemotherapy for Stage III Non-Small Cell Lung Cancer Ⅲ期非小細胞肺癌に対するカルボプラチン・パクリタキセル同時併用 66 Gy 放射線治療の安全性と有効性について			

論文内容の要旨

Ⅲ期非小細胞肺癌の治療成績は不良で、手術適応外の症例に対する標準治療である化学療法同時併用の放射線治療でも様々な試みがなされてきた。最近の第Ⅲ相試験では、通常よく行われている 60Gy 照射群と比較して、照射線量を増加した 74Gy 照射群で生命予後の改善が認められず、むしろ有害事象が増加する可能性が示唆された。しかし、こういった線量増加が予後や有害事象に及ぼす影響に関する研究は少なく、まだ十分な検討が行われていないので、当施設で行ってきたカルボプラチン・パクリタキセル同時併用 66Gy の化学放射線療法について、安全性と有効性を検討した。

2007 年 4 月から 2013 年 12 月までにカルボプラチン・パクリタキセル同時併用で放射線治療を行った 99 例の非小細胞肺癌のうち、Ⅲ期に対して 66Gy の照射を行った 46 例を解析した。放射線治療は、全例、三次元治療計画で実施し、予防的リンパ節領域にも照射を行っていたが、放射線治療の線量分布については、一部の症例で線量体積ヒストグラム(Dose-Volume Histogram: DVH)解析を実施した。

患者背景は、年齢中央値 70.9 (52.8-78.7)歳、ⅢA 期 29 例、ⅢB 期 17 例、観察期間中央値 35.7 月(生存者では 55.9 月)であった。Kaplan-Meier 法での 3 年、5 年の全生存率はそれぞれ 52.2%、34.0%、3 年、5 年の無増悪生存率は 29.1%、21.9%、全生存、無増悪生存の生存期間中央値はそれぞれ 36.6 月、9.9 月であった。Gray 法での 5 年の局所再発率、遠隔転移率はそれぞれ 37.6%、49.7%であった。有害事象では、ステロイド投与を必要とした Grade 2 (CTCAE v4.0)以上の肺臓炎が 16 例 (37.6%)にみられ、2 例が Grade 5 であった。肺臓炎以外には Grade 3 以上の非血液毒性を認めなかった。DVH 解析では、Grade 5 の 1 例は V20 (20Gy 以上照射されている肺の体積の割合) が 37%と高く、先行文献に報告されているように DVH 解析が有用と思われた。

本研究の結果は従来との報告と同等以上の成績で、特に全生存率が相対的に良好であり、また DVH 解析を用いた治療計画によって有害事象も許容範囲になりうると考えられたので、カルボプラチン・パクリタキセル同時併用 66Gy の放射線治療がⅢ期非小細胞肺癌の予後改善につながる可能性が示唆された。